

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 136 号

平成25年8月20日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.gr.jp/>

小西芳之助「ローマ人への手紙 講解説教」より (15)

キリスト教の救いとは

私は、学生の頃に、仏教の浄土門を少しく学ぶ機会がありました。浄土門の目的は仏になることでありまして、仏とは智慧無限、慈悲無限、生命無限の所有者となることであり、そういう者となることを「救い」と言います。そして浄土門では、その救いは我々が生きている間には実現しない。我々が生きている間は、救い主の約束を信じて、約束を実行していれば、肉体が朽ちる時に救い主の国に生まれ、そこで救い主に導かれながら修業し、終に仏となる。これが浄土宗の救いであり、これが浄土宗の目的あります。浄土宗の信者、求道者のすべては、こういうことをよく知っております。しかし、キリスト教においては、キリスト教の救いとはどういうものか、その目的は何処にあるのかということについて、はっきりと知ってい

る者は極めて少ない。何十年も教会へ来ているクリスチャンのうち、百人中に一人あるかないかでしょう。ただ、「愛の行ないをすること」ぐらいが、キリスト教であると思っている。そういう信者が実に多い。この教会へ来てキリスト教を学ぶのであれば、赤子、幼児の心になって聖書のお話を聴いて下さい。「自分はキリスト教は分かっている。小西芳之助はいつも同じことばかり話している。もう聴く必要はない」と思われる方は、ここへ来る必要はありません。…

キリスト教の救いとは、キリストの贖いを信じ、神の子とせられ、復活する者となるということでもあります。これをキリスト教と言い、これ以外をキリスト教とは言いません。…

キリスト教では、信・望・愛の三つが一つです。このどれでも宜しい。単数ですから。キリストの贖いを信じて、神の子とせられ、そして復活する者となること、これがキリスト教です。これを信じて日々の生活を送ってみて下さい。どういう人生が展開してくるかが、だんだん味わわれてきます。 (P. 415)

光の武具をつけよ

13章12節「夜はふけ、日が近づいてくる。それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか」。「世はふけ」というのは、現在の滅びの世界が段々と縮まってきているという意味です。現在は滅びの世です。イエス・キリストは、「闇の世」、「サタンの支配する世」と言われました。信者ばかりではなく、未信者の識者も、この世は滅びつつあると叫んでいる。「それだから、わたしたちは、やみのわざを捨てて、光の武具を着けようではないか」。すなわち、光である天国の武具を着けよう。信・望・愛を着ようと言う。「武具」というのは、注解者によりますと、誠に意味が深い。すなわち、武具というのは戦闘の時に着ける武器です。我々信者は、この世においては武具、すなわち、神の子とせられた信仰を着けて、復活の望みを着けて、愛の槍、すなわち、与えられた義務をなそうとする意思をもって、この世と戦う気構えが必要であると言っているのです。ぼんやりしていたら、この世と同じようになってしまう。この世の人と同じような考えになってしまう。そういう心構えが必要だと言っています。

(P. 417)

後世を知る者が智者

ロマ書 1 章 17 節「信仰による義人は（信仰によって）生きる」。
この聖句によって、ルッターは世界に大きな感化を及ぼしました。
また、…13 章 11－14 節、この 4 節を持ってオーガスチンは人類の歴史に大いなる感化を及ぼしました。私は、10 章 13 節「主の御名を呼び求める者は、すべて救われる」、これが恵心僧都の名において、世界歴史に大きな感化を及ぼす日が必ず来ることを信じています。
我々が復活に近づきつつあるということは、未信者には妄想のように思えるかもしれませんが、これが深き神の知恵、「wisdom」なのであります。この神の知恵によって、我々には善行をなす力が与えられる。妄想ではありません。知恵であります。

25 年前の夏、…私は伝道者になる決心ができました。その昭和 22 年 9 月 14 日の日曜日の朝 5 時頃、私は同志会を離れる時、同志会の寮生一同が、「小西先輩の旅路、一路平安を祈る」と黒板に書いてくれました。私は、それに応えて、蓮如上人の言葉「たとひ一文不通の尼入道なりとも、後世^{ごせ}を知る者を智者とする」と書きました。…
諸君、君達は智者ですか、それとも愚者ですか。 (P. 418)

汝ら、復活の希望に満たされよ！

キリスト教道徳というものは、この復活の希望によって、我々が新しく造り変えられた時に、実行することができる。12章のキリスト教道徳の初めに、「兄弟たちよ。そういうわけで、神のあわれみによってあなたがたに勧める。あなたがたのからだを、神に喜ばれる、生きた、聖なる供え物としてささげなさい。それが、あなたがたのなすべき霊的な礼拝である。あなた方は、この世と妥協してはならない。むしろ、心を新たにすることによって、造りかえられ、…」とあります。この「新たに造りかえられる」というのは、復活の望みによって人生観を一変する、ということであります。キリスト教道徳の根底は、復活の希望です。パウロは、12、13章で個人の道徳、公人の道徳を説き、最後に13章の終りで再び復活の希望について語り、キリスト教の道徳は復活の希望によって実行せしめられることを述べました。…その最後、15章13節においては「あなたがたを、望みにあふれさせて下さるように」と、復活の希望に立ち返ってロマ書を終えています。ロマ書を一言にしていえば、「汝ら、復活の希

望に満たされよ！」ということであります。これはロマ書の結論であるのみならず、聖書全体の結論であります。(P. 419)

ロマ書の6つの霊的真理

ここにロマ書の6つの霊的真理を要約しておきました。よく見て下さい。この題1、第2が基礎です。これが分からないと次の定理は分かりません。これに興味のない方は、この教会にいくら来られても、この基礎定理が分かっていなければ、ナンセンスです。私は、50年前に内村先生からこの基礎の定理を学びました。その時はまだ、第3以下の定理は分かりませんでした。しかし、50年経った今、神様から教えられて、要約少し分かるようになりました。

(図 次のページ)

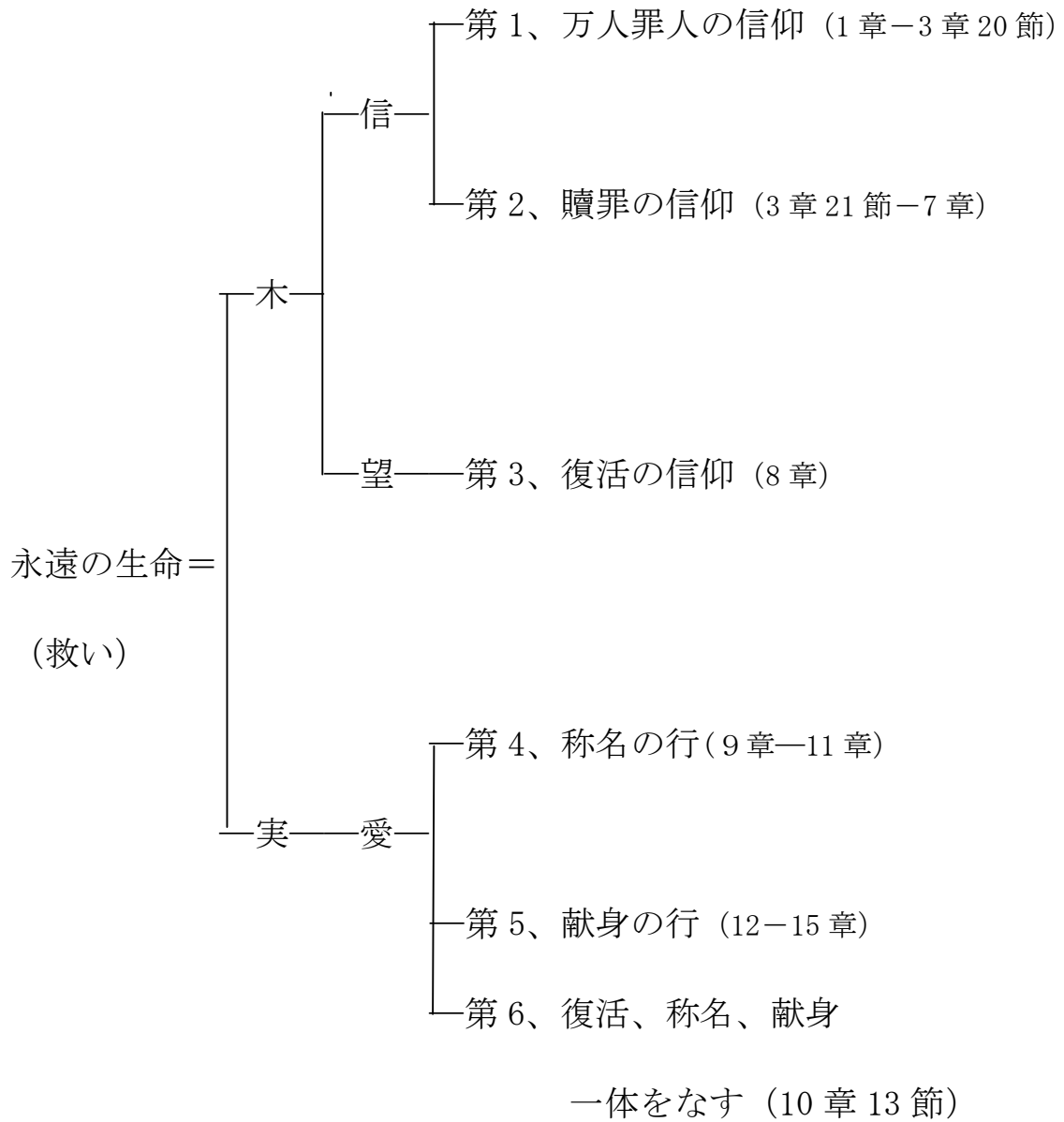
3章23節「すなわち、すべての人は罪を犯したため、神の栄光を受けられなくなっており」

3章24節「彼らは、値なしに、神の恵みにより、キリスト・イエスによるあがないによって義とされるのである」

私の説教は、右の2節に書かれている基礎の上に立っています。

(P. 421)

「ロマ書の6つの霊的真理」



(注 「エンカウンター第126号」P.6に出ている「ロマ書の霊的真理」の図では、霊的真理は5つでありまして、この図の第6は、書かれていませんでした。)

パウロの伝道方針

本日の 15 章 14－33 節に入ります。

これはパウロの最後の挨拶と見てよい。本文はすでに 15 章 13 節をもって終わりました。すなわち、パウロは、「君たちが、信仰が本当に分かって、主の名を呼ぶことができるようになり、そして聖霊の力によって、復活の望みのあふれさせて頂くように」という祈りをもって、本文を閉じました。そして、いよいよ本文が終わり、最後の挨拶の中で、自分の伝道方針を書きました。

14－15 節「さて、わたしの兄弟たちよ。あなたがた自身が、善意にあふれ、あらゆる知恵に満たされ、そして互いに訓戒し合う力のあることを、わたしは堅く信じている。しかし、わたしはあなたがたの記憶を新たにするために、ところどころ、かなり思いきって書いた。それは、神からわたしに賜った恵みによって書いたのである。」

これは一つの挨拶であります。

(P. 429)

小西と高円寺東教会の関係

パウロとローマ教会との関係は、パウロとガラテヤ教会あるいはピリピ教会との関係とは違っていました。自分が建てた教会ではない。そうですから、パウロには遠慮がありました。私も同じです。私は、ここでは皆さんに随分思い切った事を言っています。福音を聴きに来られている自分の息子や娘達に話しているつもりですから。もしも、私が他の教会に行ったなら、こういうわけにはいきません。もっと遠慮して話します。もし、他の教会から来られた方がここにおられましたら、この私の失礼をお許し願いたいと思います。私は、ここへ来られた方に対して、「よく来て下さいました」などとは言いません。ここでは真剣に福音を伝えたい。信仰の幾分かでも分かって頂きたい、それだけを願っています。たとえ、教会堂が建たなくとも、また、たとえ、献金が少なくて牧師が食えなくなり、死んでも宜しい。私は、最後まで福音だけを述べます。私にはそういう欲望があります。私には言いたいことを言わせて下さい。それがいやな方は、ここへ来て頂かなくともよいと思っています。

(P. 430)

自分の生涯に、信望愛の定理を応用せよ

本日のレッスンから、パウロ先生の雄大なる伝道の計画を学びました。…パウロは、…異邦人のために、生涯をかけて30年間、東奔西走、1400マイルを3回にわたって伝道し、さらにイスパニヤにまで行くという大望を持っていました。当時のユダヤ人からすれば、これは奇蹟です。パウロのこの偉大な生涯はどこからきたのか。この恐るべき献身、この愛の働きというものは、第4までの定理「信と望」から出てきました。

諸君！ 注意して下さい。パウロの偉大なる愛の生涯というものは、この4つの定理の応用問題の答えに過ぎません。諸君もパウロになり、自分の生涯にこれらの定理を応用してみてください。…私の希望は、この福音をもっと深く知ることです。パウロはイスパニヤにまで伝道をしたと思っていたのですが、私はこのパウロから頂いた福音をもう少しよく知りたい。…この高円寺東教会において、この福音を宣べ伝えたい。他のところでは伝えたくありません。これが私の願望です。一人でも、この高円寺東教会から、パウロの福音を理解する信者が出て欲しい。これが私の願望です。(P. 434)

無名になって全力を尽くせ

最後に付け加えたいことは、各自の使命は皆異なっているということです。パウロは世界異邦伝道を使命としました。私は、ロマ書研究を使命とします。この使命は、私の目の前におかれた使命であります。…諸君のお陰で、強制的に聖書を勉強させられた結果であります。お陰で、少しくその真理が分からされてきました。諸君！…目の前に置かれた自分の義務を真剣に実行し給え。その結果、必ず君達にも、使命が与えられることと確信する。

第2に、私は先ほど、パウロのイスパニヤ伝道が実現されたか、またうわさ通りにパウロは処刑されたのかについて、天国へ行ったらパウロに聞くと申しました。このことは、パウロが無名の人であったことを意味している。今でこそ、パウロと言えば人類の大教師ですが、その当時は一介の貧乏坊主であったに違いありません。世間に注視されていなかった。このことは、この世の人間に注視されるような人間は、本当の宗教家ではないかも知れないという可能性を示しています。本当の宗教家というものは、凡人には分からない

と思います。私は、パウロ先生は無名の人であったと思う。諸君！

無名になって全力を尽くし給え！ (P. 436)